

第1回

なぜ子どもの貧困を 防がなければいけないのか



一般社団法人日本プレミアム能力開発協会代表理事

富井 真紀

とみい まき 父子家庭で育ち、ライフラインが止まり借金取りが毎日取り立てに来るような生活で、実父からの金銭搾取もされていました。そんな子ども時代の経験から、子どもの貧困問題や児童虐待問題に関心をもち、さまざまな活動を行っています。

「子どもの貧困」は保護者の貧困

「子どもの貧困」という言葉は、ここ数年で一気に広まりました。

私は、九州の宮崎県で、「子どもの貧困」問題と児童虐待問題に軸を置いて、さまざまな視点から支援活動を行ってきました。例えば、「プレミアム親子食堂」という既存の飲食店を使つての食事支援活動は、丸五年間続きました（二〇二〇年一月で終了）。また、食糧や学用品などの物資を生活困窮世帯に支援する「宮崎子ども商店」は現在も行っている活動です。行政機関やスクールソーシャルワーカー（SSW）や助産師など、いろいろな専門職と手を取り合つて、虐待傾向のある保護者や生活困窮世帯の親子への物資支援や相談支援などに取り組んでいます。私が行うさまざまな活動の中でも、「子どもの貧困」という言葉はよく使われます。まずは、「子どもの貧困」とはいったいどのような状況を指すのか説明したいと思います。

子どもは一人で経済的自立をしていない限りは、必ず保護者として大人が生活を支えています。ですので、子どもは一人つきりではいわずに「貧困」と呼ばれる状態にはなりません。つまり、子どもの生活を支えるはずの保護者が貧困状態に陥っているからこそ生まれる問題、それが「子どもの貧困」であると言えます。しかし、残念ながら現代の「子どもの貧困」問題には、経済的な面の貧困のみならず「心の貧困」という問題が隠されているのです。

「心の貧困」問題とは、保護者の経済状況にかかわらず、保護されるべき子どもが「心の飢え」を感じる状態のことです。たとえ暮らしが裕福であっても、子どもの養育をまともにこなすことができず、ネグレクト状態になり、子どもが孤独感を抱えながら生活している状況などもあります。

貧困問題を解決させる意味

今の日本で騒がれている「子どもの貧困

「困」問題は、他国の貧困問題でよく取り上げられる餓死につながり命にかかわるような「絶対的貧困」ではなく、「相対的貧困」の問題になります。ですから、緊急に問題を解決しなければいけないと騒がれることに対して、違和感を持つ方もいらつしやるかもしれません。

ここで少し「絶対的貧困／相対的貧困」について触れたいと思います。まず一般的に「貧困」という言葉を聞くと、アフリカなどで見られる栄養失調の子どもたちなどを思い浮かべる人も多いのですが、これは「絶対的貧困」と呼ばれるものです。国や地域の生活レベルとは関係なく、生きていくことが困難とされるケースに当てはまります。対して「相対的貧困」とは、住んでいる国や地域の生活水準と比べた際に困窮している生活を送っているケースが当てはまります。現在の日本では、年収が一二万円以下の世帯が「相対的貧困」に当てはまります。

私は、支援活動のかたわら講師として、教師や学生のみなさん、議員や行政職員など多岐にわたる方々の前でお話しさせ

ていただくことがあるのですが、その中でもよく年配の方に言われる一言があります。「昔はみんな貧困だった」。もちろん、そう言われる方々のお気持ちも十分に理解できます。戦後の大変つらい時代を乗り越えて今を生きている方たちからすれば、今騒がれている貧困問題なんて緊急事態でも何でもありません、そう感じることでしよう。

しかし、残念ではありますが、時代は刻一刻、どんどん先に、未来に、進んでいるのが事実なのです。その中で「自分たちも子ども時代は苦しかったから」という理由だけでは、現代の子どもたちと同じ苦しみを味わってよいということにはならないのです。

時はすでに進んでおり、昔から続く子どもの苦しみは、われわれ大人の手によって取り払っていつてあげなければいけない時代が来ているのです。子どもたちは、昔の時代にいた子どもたちと同じではないのです。

今現在も同じように、社会は一年一年大きく変化しています。特に去年は新型

コロナウイルスによって、人類が未知の領域に迷い込んだかのような激しい変化を経験しました。感染が拡大したことによって、職を失い、生活費が底をつき、親子で心中を考えた家族が、世界中にどれだけたくさんいたかなど、想像すらできません。

時代が変わり続ける中で、子どもや保護者の貧困問題の解決は変わらず後回しにされてきた結果が、今ここに来て、膿のように放出され始めています。「子ども」の貧困問題をそのまま放置することによって危惧されるのは、ただ単に目の前にいる子どもや保護者が困るというだけではなく、後々は社会全体が困り果てる事態を招くことにつながるということです。

貧困問題を放置しておく、教育格差が広がり、将来の経済格差も広がります。また、基本的な生活を知らずに育つ子どもが大人になると、主体性がなく自己肯定感が限りなく低い人間になると言われています。そして、そうした人が増えた場合、生活保護の受給者が大幅に増える

と考えられます。

このように、現在の「子どもの貧困」を放置しておくと、将来的に社会が多額の経済的損失をこうむるといふ推計も出されました（三菱UFJリサーチ&コンサルティング「子どもの貧困の社会的損失推計レポート」日本財団、二〇一五年）。

実在する貧困の実態

私が今まで活動してきた中で、実際に出会ってきた親子の事例を二つ、ご紹介します。

【事例1】

まず一つ目に紹介するのは、父親と母親、そして中学生と小学生、生まれたばかりの乳児の三人の子どもの、五人家族の事例です。

父親も母親も働いていましたが、母親は少し精神疾患を持っており、たまに薬の過剰摂取で救急車で運ばれることもあったりして、スーパーでのパート仕事は十分に稼げている状態ではありませんで

した。また、父親は、自宅からとても遠く離れた勤務地で非正規職員として働いており、交通費は出ず、車の維持費などもかかり、少ない稼ぎで家計は火の車でした。

そんな中で生まれてきた乳児を、保育園などに入れる余裕がなく、結局は、長子である中学生の子どもが学校を休んで、ミルクやオムツ替えなどの面倒を見ていました。

中学校の担任の先生が生活を心配して、民間の支援団体を活用してみるといふ提案を保護者にしていただき、情報を先生自ら検索して収集し、保護者に伝えてくださったことから、私たちの活動につながった、というケースでした。

その中学生の子は、乳児の面倒を毎日見ること学校を休まざるを得ず、また経済的に家計が苦しいと親から言われているため、お昼ご飯が食べられずにいました。経済的に困窮している家庭でも、学校に行くことさえできていれば給食が食べられるのに、この子は給食も食べられず、毎日、きょうだいの面倒を見るこ

とに必死で生きていました。

【事例2】

二つ目に紹介する事例は、母一人、小学校低学年の子一人の家族です。

母親は夜の仕事をしており、基本的には朝方に自宅に帰宅してすぐ就寝。子どもが登校する時間は寝ているので、当然に朝ご飯の用意などもされておらず、子どもが帰宅する時間には彼氏を自宅に連れ込んでおり、夕方には出勤するため彼氏と自宅を出るので、子どもは一人ぼっちでコンビニ弁当を食べる、といった生活でした。

母親は時には彼氏と一週間程度の長期旅行に行ってしまうことがあり、その間、低学年の子どもはたった一人で過ごしていたようです。

ライフラインもたびたび絶たれてしまう生活だったようです。ある日、子どもは学校に水筒を持参しなくてはいけないときに、自宅の水道が出ないことがありました。困り果て、近所の川のドブ水のような濁った水を水筒に汲んで持ってい

ったそうです。

この世帯は、子どもの同級生の保護者が気にかけてくださり、一生懸命に勇気を出して児童相談所に通報してくださいったことで、解決の道に一步を踏み出すことができました。

見える問題と見えない問題

「子どもの貧困問題をなんとか解決していきたい！」

そう考えても、実は何気にわかりにくい問題だったりします。表に見えている問題もあれば、深刻なケースに限って家庭という箱から外に問題が漏れず、表からは見えにくい問題が隠されていたりします。

例えば、保護者や子どもが外に向かってSOSを出すことができず、かつ、しっかり人を頼むという行動がとれていれば、周囲も手を差し伸べることが容易にできます。一方、保護者がプライドを傷つけられたくない等の理由で外部をシャットアウトしてしまい、他人を一切頼ら

ず、相談もしようとしない場合があります。そうになると、外からは問題が見えなくなりまます。子どもも、親を見て育ちますから、同じように第三者に助けを求め拒みます。

われわれ大人が、この「表に見えない貧困問題」を、いかに見つけ出して多方向につなげることができるかが、今後の「子どもの貧困」問題のみならず、子どもにかかわるたくさんの問題を解決していく鍵になるのです。

「かもしれない」から「まずはドアを開けてもらう」

表から見えない「子どもの貧困」問題を見つけて出すために、私が活動に混ぜ込んできた一つの方法は、「物資支援」です。わかりやすく言えば、フードバンクや子ども宅食などと呼ばれているようなものに近い形になります。困り事を抱えている「かもしれない」と感じ取れる世帯に対して、その家庭に不足している必要だと感じる物資を教えてもらい、その物資を無料で自宅にお届けする方法です。

ここで大切なのは、「かもしれない」という段階での介入の大切さです。

だいたい、物事は大事になってからでなければ、なかなか外に情報が出てきません。ですが、実際には、大事になってからの対処では正直遅いのです。

ですから、予測の段階でよいので、生活に困窮していたり、子育てを困難に感じていそうだなと思う家庭があれば、民間団体で物資支援をしているところとながりをもち、協力しながら「まずは玄関のドアを開けてもらう工夫」をしていくことが、問題を表に出すための第一歩となります。

*

この連載では、私自身が貧困家庭で育ってきたと感じたことや大人に求めていたことをお伝えしたり、実際に支援活動で出会った貧困・虐待などで問題を抱える子どもや保護者のお話などをお伝えしていきたいと考えています。一年間よろしくお願ひします。